



はじめに

「6カ国転校生ナージャの発見」へようこそ！

これから読者のみなさんをお連れするのは、6カ国転校生のナージャがロシア、日本、イギリス、フランス、アメリカ、カナダで実際に通っていた現地校。そのそれぞれの学校での体験や発見などを一緒に疑似体験していきます。“隣の学校”では味わえない体験や、当時からだいぶ時間が経っているので、その時代へのタイムトラベルも含まれています。すべてナージャのリアルな体験だからこそ、きっと読者のみなさんにとてベストな学び、そして自分らしく生きるコツのヒントになると思っています。

では、この本の主人公「ナージャ」を簡単に紹介します。意外かもしれないが、ナージャは人見知りです。たくさんしゃべって、友だちをつくってしまうタイプではありません。周りをじーっくり観察して、もじもじしながら行動するタイプです。ソ連のレニングラード（現ロシア・サンクトペテルブルク）に生まれて、7歳のときに両親の転勤で突然転校生人生が始まることに……。どんなことが待ち受けていたのか、早速、ナージャと一緒に6カ国転校生の擬似体験を始めましょう！ みなさん、準備はいいですか？

もくじ

はじめに	1
6つの国、4つの言語で教育を受けて育つとどうなる？	4
ナージャの6カ国転校ヒストリー	
この本を楽しむためのヒント	6
プロローグ 5つの質問	7



第1章 ナージャの6カ国転校ツアー

<u>筆記用具は？</u> 「よく書く」ためのえんぴつ。「よく考える」ためのペン.....	30
<u>座席は？</u> 小学校の座席システム。実は、全部違った.....	34
<u>体育は？</u> ロシアの学校では、体育で整列するとき背が高い人が前だった	41
<u>学年は？</u> ロシアでは、「1年生」という学年が2学年ある	47
<u>ランチは？</u> 小学校のランチシステム。実は、さまざまだった.....	51
<u>数字は？</u> 日本の学校では、数字の書き方も個性よりカタチだった.....	58
<u>テストは？</u> 世界では、90年代からこんなものがテストに持ち込み可だった... ..	64
<u>満点とは？</u> フランスの学校では、16/20が100点!?	70
<u>水泳は？</u> 日本の水泳教室は、タイムよりカタチだった.....	74



<u>音楽は？</u> アメリカの学校では、本を読むようにバイオリンを習う	79
<u>ノートは？</u> 小学校のノート模様。実は、こんなにたくさんあった.....	84
<u>お金は？</u> イギリスの学校では、リンゴでお金を学ぶ.....	91
<u>校長先生は？</u> カナダの学校では、悪ガキほど校長に会う	95
<u>夏休みは？</u> ロシアの学校では、夏休みが3カ月ある	99
<u>科目は？</u> カナダの学校で体験したちょっと変わった科目 5選	106

第2章 大人になったナージャの5つの発見

ナージャの発見① 「ふつう」が最大の個性だった!?	114
ナージャの発見② 苦手なことは、克服しなくてもいい！	119
ナージャの発見③ 人見知りでも大丈夫！ しゃべらなくても大丈夫！ ...	123
ナージャの発見④ どんな場所にも、必ずいいところがある！	128
ナージャの発見⑤ 6カ国の先生からもらったステキなヒントたち	133

エピローグ 5つの質問【解答編】	139
おわりに	160



6つの国、4つの言語 で教育を受けて育つと どうなる？

こうなる



キリーロバ・ナージャ
ソ連・レニングラード生まれ
(現ロシア・サンクトペテルブルク)

-
- ✓ 小中学校は、毎年、違う国の現地校に通う。
- ✓ 小2はスキップし、弟と一緒に保育園に通う。
- ✓ 小学校の年数が、ロシア4年間、アメリカ5年間、日本6年間と国によって違うので、小学校は3回卒業。
- ✓ 毎年、新しい言語もしくは新しい方言で学ぶ。

ナージャの6カ国転校ヒストリー

ロシア（サンクトペテルブルク／ロシア語）……………小1（6歳）



日本（京都／日本語）……………年長（7歳）



イギリス（ケンブリッジ／英語）……………小3／前半（8歳）



フランス（パリ／フランス語）……………小3／後半（9歳）



日本（東京／日本語）……………小4（10歳）



アメリカ（ウィスコンシン州マディソン／英語）……………小5（11歳）



日本（東京／日本語）……………小6（12歳）



カナダ（モントリオール／英語・フランス語）……中1、中2（13-14歳）



日本（札幌／日本語）……………中3（15歳）

※9月、4月で一部重なっている国がありますが、ここでははぶいています。



この本を楽しむためのヒント

—— 1 ——

まず、次ページから始まる「5つの質問」を読みながら、
「自分だったらこれ！」を選んでみてください。

—— 2 ——

第1章では、ナージャと一緒に6カ国を転々としながら、
それぞれの学校や学びのスタイルを疑似体験していきます。

右も左も分からないまま、

知らない環境に飛び込むのはなかなか大変！

読者のみなさんのために、転校生ナージャが

実践したことからヒントです。

「なんでそうなっているのかなあ」

「自分だったら、どうするかなあ」

ぜひ、これを心の中で問いかながら、読み進めてみてください。

—— 3 ——

第2章では、大人になったナージャと一緒に、

6カ国転校をしていた子どもの頃に感じたこと、

大人になってから感じたことを合わせて振り返りながら、

時間を超えてナージャが見つけたさまざまな発見をヒントに

「学びってなんだろう？」

「自分らしさってなんだろう？」

「ベストってなんだろう？」

を一緒に考えていきます。

では、いよいよ出発です！



プロローグ

5つの質問

5 Questions



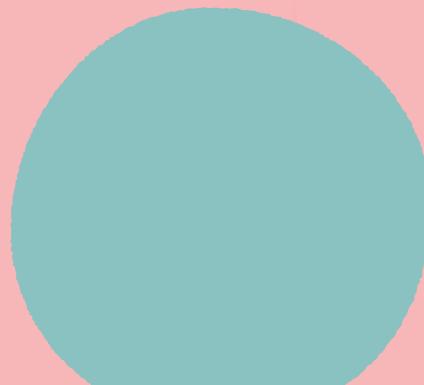
Q.1 小学校の筆記用具、どちらを使う？

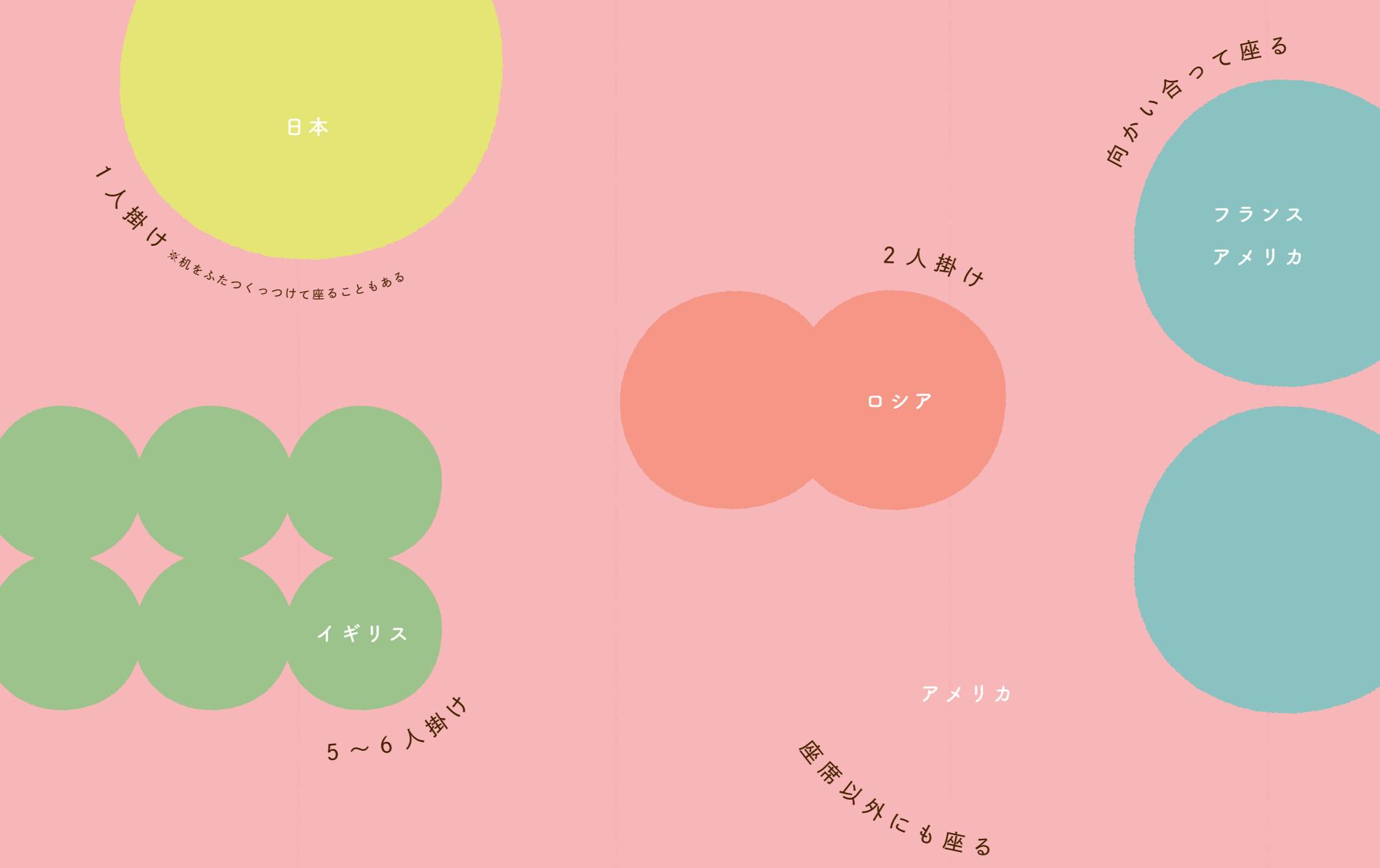
えんぴつ？

ペン？



Q.2 小学校の座席のカタチは？





A.2 小学校の座席のカタチは？

(それはなぜ? → P144)

Q.3 小学校の体育は？

整列する

整列しない



整列する国



整
列



し
な
い



国

Q.4 小学校の入学年齢は何歳？

5 歳

6 歳

7 歳

A.4 小学校の入学年齢は何歳？

5歳で入学する国

イギリス

7歳で入学する国

ロシア

ロシア

日本

フランス

アメリカ

カナダ

6歳で入学する国

(それはなぜ？→P152)

Q.5 小学校のランチタイムは？

給食

家で食べる

弁当

A.5 小学校のランチタイムは？

ロシア

日本

イギリス

フランス

アメリカ

給食

イギリス
フランス
アメリカ

弁当
家で食べる

フランス

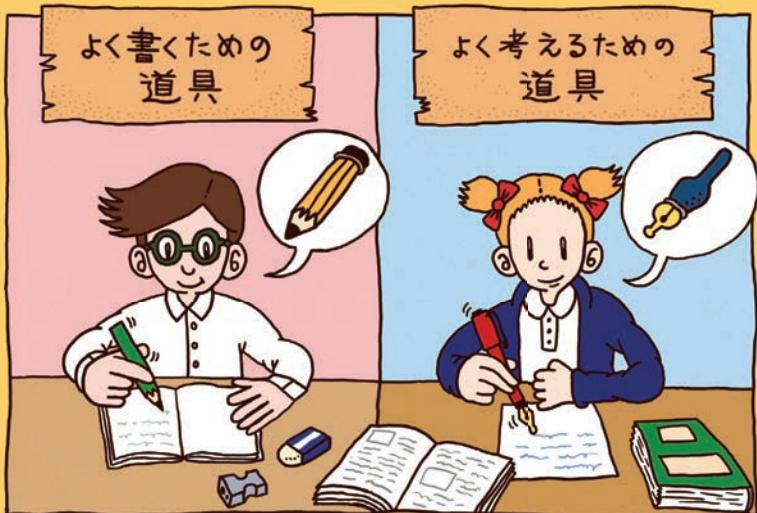


第1章

ナージャの
6カ国転校ツアー



筆記用具は？



「よく書く」ためのえんぴつ。

「よく考える」ためのペン



イギリスの学校に転校してビックリしたことがある。ロシアではみんなペンを使っていたのに、ここではみんなえんぴつを使って文字を書いているではないか。えっ、だってあの美術の時間に絵を描くためのえんぴつですよ。算数の図形ならまだしも、文章を書いてたんですよ、文章。とても不思議でたまらなかった。

当たり前のようにペンを持ってきたわたしも、すぐに先生からえんぴつを使うように言われた。が、しばらくえんぴつで書くことに抵抗とためらいがあった。下書きならともかく本番をえんぴつで書くなんて納得がいかない。自分の意見を書いた感じがしないし、それはまるで意見が定まっていない文章のように感じてもやもやが続いた。

でもある日、気づいてしまった。えんぴつの上には消しゴムがついているではないか。これは、消せるぞ。つまり、書き直せる。つまり、気を抜いても大丈夫ということだ。そこから、スラスラと書けるようになった。

ロシアの学校では、文字を書くときは必ずペンを使う。わたしの時代は、ボールペン。親の時代は、万年筆。色は青と

決まっている。黒ではダメだし、赤は先生の色だ。えんぴつは、ペンケースの中で眠っている、出番が美術の授業と算数で図形を描くときにしかるべき地味なやつという立ち位置だ。

では、なぜペンを使うのか。そこには、おそらく理由がある。簡単に言うと、ペンは一度書いたら終わりだ。書いたものは直せない。実は、これが最重要ポイントだ。

例えば、作文を書くとしよう。えんぴつならちょっと考えてすぐに書いてみるに違いない。「なんか違うなあ」と思ったら消してまた書けばいい。でも、ペンならまずとてもよく考えないといけない。何を書くか。どう書くか。スペルは。レイアウトは。言葉の区切り方は。時には、試しに下書きを書くこともある。このときは、えんぴつを使うこともある。すべてを隅々までイメージできたら初めてペンを持って書くという仕上げに入る。

書いたものは、消すことができない自分の意見として永遠に紙に刻まれる。だから、意見もそれなりにしっかりするし、なによりキレイな考え方抜いた文章が残る。つまり、「よく考
える」を究めた文章になるわけだ。

なぜ、そこまでするようになったのだろうか。裏には、採点方法がある。内容の他に、書き方自体も評価の対象となる。文法やスペルももちろんだが、字や改行などのキレイさも見

られる。間違えたら、もちろん減点。5段階しかない評価システムなのでひとつでも下がったらかなりのダメージだ。だから、書き直すしかない、書いた文章全部を。数ページの文章を書き直すのはかなりの時間と集中力を必要とするので、なるべく書き直しは避けたい。宿題なら数時間かけて何度も書き直してもいいが、テストだと時間切れにもなり得る。

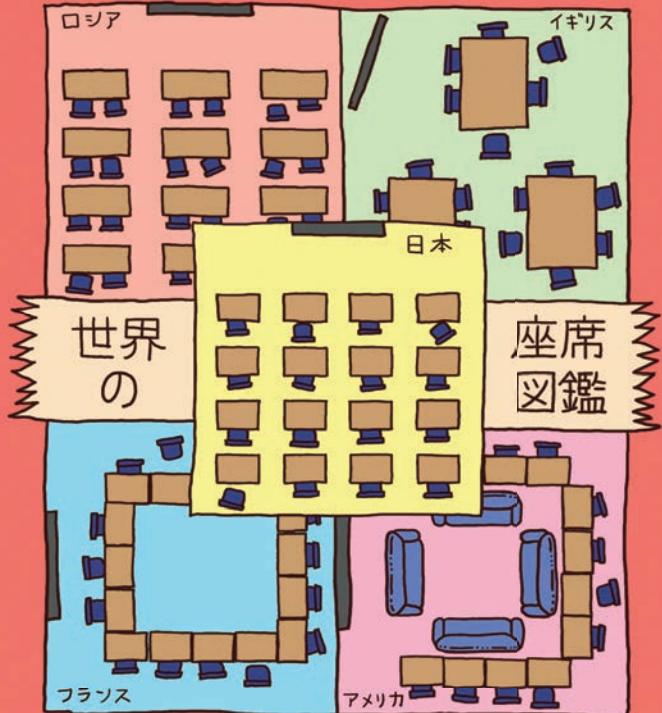
だから、よく考えてから書くことを自然と覚えていく。えんぴつを使って「書きやすく」するのか、ペンを使って「考えやすく」するのか、実は書く道具がそのプロセスを決めるのだ。

ここでは、えんぴつと青のボールペンを比較したが、例えば、ペンの色を変えたり、マジックや万年筆にしてみるとどうなるか。さらに、デジタルツールの登場によりタイピングしたり、フリック入力したりすることも多くなってきており、タブレットを使って書いた文章と紙を使って書いた文章はどう変わるのが。教育の現場にデジタルツールを入れることに対していろんな議論がある。アナログがいいのか、デジタルがいいのか。

実は、どちらかが正解なわけではなく、ツールを変えればアウトプットも変わる。それがどう変わって、そこから書いている子どもが何を学べるかが、実はいちばん大事かもしれない。



座席は？



小学校の座席システム。実は、全部違った

小学校の席。どういうレイアウトでしたか？ みんなで黒板とその前に立つ先生に向かって座るのが一般的だと思っていたわたしは、8歳にしてその考えを覆されることになる。イギリスの小学校で。

その後も、さらにいろんな国いろいろな座席システムに出会った。男女ペア席、一人席、5～6人でひとつのテーブルを囲む座り方、机をひとつの円をつくるように並べてみんな向き合う座り方、複数の家具を教科ごとに使い分けるやり方……。それは、転校するたびにルールが変わるゲームのようであ面白かった。

ロシアの小学校では男女がペアでひとつの長めの机に座る。男子が左、女子が右。左利きがいる場合は左利き同士で座る。席替えはあまりなく、極端なことを言えば、10年同じ席、同じペアということも十分あり得る。男女ペア席の場合、子どもの授業における集中力がアップするようだ。なぜなら、小学生の男女は友だちになることが少なく、そのため授業中の雑談が少なくなり、みんなまじめに先生の話を聞くようになる。

また、あえてやんちゃな男子を勉強がデキる女子の横に座らせるとこの効果はさらに向上する。責任感が強いデキる女子が勝手にやんちゃな男子の世話役になることが多く、男の子の学力向上の可能性が見込めるようだ。

みんな、黒板の前にいる先生に向かって座り、先生の話を聞いて、聞かれたら挙手して答える。正解ならそれが個の優越感につながり、毎日がある種の戦いだった。これが当たり前だと思っていた。

小学3年生でイギリス・ケンブリッジの小学校に転校した日、教室にはまるでごはんを食べるようないくつかの大きめなテーブルが並んでいた。ほう、ここはきっとごはんを食べる部屋だ。ロシアでは朝食も学校で出たので、朝一にそこへ通されたのも理解できる。

しかし、ごはんが出る気配はなく、5～6人でテーブルを囲んだまま授業に突入した。そして、しばらくすると授業中なのにみんな楽しそうにしゃべり始めた。「え？ しゃべっていいんだ？」。状況が飲み込めないままぼーっと座っているわたしに隣の女の子が話しかけてきた。

「今、この算数の問題をみんなで解いているところなんだけど、答えについて意見が割れてるの。あなた、答えはいくつになった？」。それから、みんなでチェックしてひとつの答

えを選びテーブルごとに先生に発表していく。

このやり方は他の教科でも続いて、わたしを女の子が助けてくれたように、何か苦手な科目がある子がいると誰かが教えてあげる。なるほど、ここは個人戦ではないんだ。勝負の世界に生きてきたわたしにはとても新鮮だった。教科ごとに輝く子どもが必ずいた。「この教科は○○に聞こう！」というのが学びのスタンスだった。

次の転校先はフランス・パリの小学校だった。フランスではフランスに来たばかりの子どもがフランス語をメインに学ぶための外国人クラスだった。ここには、もう大きなテーブルの姿はなかった。しかし、みんなの机が円をつくるように並んでいた。授業が始まると、先生は円の中に入って、必要になったら子どものところへ行く形式で授業が進んだ。

この座り方だと子どもが常にメインになった。先生はみんなに問い合わせると、みんな激しく議論した。まるで小さい国連のようにそれぞれが自分のバックグラウンドから意見を述べた。意見を述べないとここにいる意味がなくなるのでみんな必死で主張する。

「なるほど、こういう意見もあるのか」「なんで、そう思うんだろう」。これが、お互いのことを知るキッカケにつながり、多くの場合は、家に帰って親にも意見を聞くことであら

ためて自分の世界における立ち位置を知る。

宗教、言語、主義、価値観、国民性など、いろんなことが浮き彫りになっていく。先生はある種のファシリテーターであり、正解／不正解を言うことは計算問題と文法以外にあまりなかった。そうか、正解がないこともたくさんあるんだ。わたしには、新鮮だった。

4年生になると、わたしは日本の東京にある小学校に転校した。ここは、ロシアに似た座席システムで、一人席だけどふたつくつけて座ることもあるから一応隣はいる。

この場合、みんな前を向いて、基本、隣の人よりも先生との会話がメインになる。ロシアと同じでこれも先生が生徒にとにかく教えて、生徒が考えて先生に答えを伝える方式の教え方になる。

ただ、違いは、みんなで多数決をよくするところにあった。すごくいい意見を持っている人がいてもそれが選ばれないことがあります、代わりにみんなで決めた当たり障りないものが選ばれたとしてもみんな満足そうにしていた。

ここでは、「いい」よりも「みんなが選んだ」が重要だった。これが、不満を生まない理由につながり、みんなポジティブに決めたことに取り組んでいた。そうか、みんなで決めるとその後のやる気に関係してくるのか。このやり方も確かに面白いと思った。

に面白いと思った。

5年生のとき、アメリカ・ウィスコンシン州の小学校へ転校した。「おお、また円になって座るやり方か！」と思っていたら、真ん中にじゅうたんがありその上にソファがいくつかあった。まるでリビングのようだ。そして、ちょっと離れたところに大きめのテーブルがひとつ置いてある。

ここでは、目的に応じて座り方を変える方式。個人作業をするときとみんなで議論をするときは、円に並んだそれぞれの席へ。国語の授業で読み聞かせをするときは真ん中のソファでリラックスして聞くとよく頭に入る。ちょっとした決めごとや連絡事項もソファでやると一体感が生まれる。また、算数の授業では先ほどの大きめなテーブルが使われる。問題が解けたらそこへ行き、個別に先生に見てもらうのだ。そうすれば、能力に応じて問題を変えることができる。

座り方を変えながら学びへのスタンスを変えていく。先生は偉いというよりは、遠い親戚のような感覚になる。

特に理由がないように見える座席の在り方は、実は教えの方針を示している。真剣に聞いてほしいのか、発言してほしいのか、みんなで意見をまとめてほしいのか。正解はない。

日本の子どもをフランス式の座席に座らせると発言するようになるのか。個人主義のロシアの子どもをイギリス方式に

座らせるとチームワークをするようになるのかなど、とても興味深い。

児童の性格や教えることに合わせて座り方をシフトさせれば、いろんなやり方があることを子どもたちにも教えることになり、将来につながっていくかもしれない。

6カ国転校生 ナージャの発見
キリーロバ・ナージャ・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定価：2,420円（10%税込）
発売日：2022年7月5日
ISBN：978-4-7976-7413-2

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)